

コロナによる全国一斉休校があけた5年前の6月、現高校3年生の野球部員、郡君と篠塚君が中学野球部に入部した。当時の部員は3名。中1の時は鹿野中、平井中、中2の時は神栖一中、中3の時は鹿島中と合同チームを組ませてもらった。

いろいろなチームにお世話になりながら活動が続けた。そんな状況の2人だったが、高校野球をすることに迷いはなかったようだ。篠塚君は中3最後の大会が終わった後、すぐ高校野球の準備を始めた。郡君も後輩の中学生の練習をみながら高校野球の準備を始めた。

彼らが高校1年生になった時、それまで合同チームを組んでいた高校野球部に野球経験の無い上級生が入部し、単独チームで夏の大会に出場することになった。一つ上の高校2年生には豪腕、川口先輩がいたが、その球を受けるキャッチャーがいない。そこで、全くキャッチャー経験の無い高校1年の郡君がキャッチャーに抜擢された。川口君のボールで手は腫れ上がったが大役をこなした。高校2年生の時は夏の大会で2勝し、高校3年生の夏の大会を迎えた。1回戦の相手は古豪日立一高。甲子園出場経験もある日立一高は、メンバーのほとんどがシニア経験者か県北選抜の選手。正直、清真学園より格上のチームだ。

そんな中、ショッキングな出来事が起こる。大会直前の練習中に篠塚君がボールを顔に当て、目の下の骨を折ってしまったのだ。私も学生時代、目を怪我したことがある。『もし、ボールが顔に当たったら失明するかもしれない。』この恐怖を感じながら野球をするのは、並大抵の覚悟ではできない。3塁コーチャーなどをするのかなと思っていたが、何とファーストでスタメン出場していた。そして、顔にはフェイスガードがつけられていた。

36℃を越える猛暑の中、フェイスガードをつけて野球をするのは過酷だ。しかし、篠塚君は誰よりも声を出し、難しいファーストライナーをキャッチした。郡君は2回から急速マウンドにあがり、3回、4回を無得点に抑えた。

試合は13対0で負けた。8人の高校2年生は相手チームや高校3年生の2人の先輩から何かを学んだのではないだろうか。この経験を是非、来年に活かしてもらいたい。

現在、中学野球部の1・2年生は26名に増え、秋の新人戦に向けてチームがスタートとした。放課後にチーム練習や、紅白戦をしている中学野球部の様子は2人から見ると隔世の感があるだろう。

先輩から様々なものを引き継いで『伝統』が磨かれる。コロナ禍、部員不足、そんな中高校野球を最後までやり抜いた2人にエールを送りたい。また猛暑の中、応援していただいた応援団、チアガール、音楽部、生徒、保護者の皆様ありがとうございました。

(中学野球部顧問 押見弘一)